



トピックス…①

乳用牛の黒毛和種交配割合が記録的高水準に

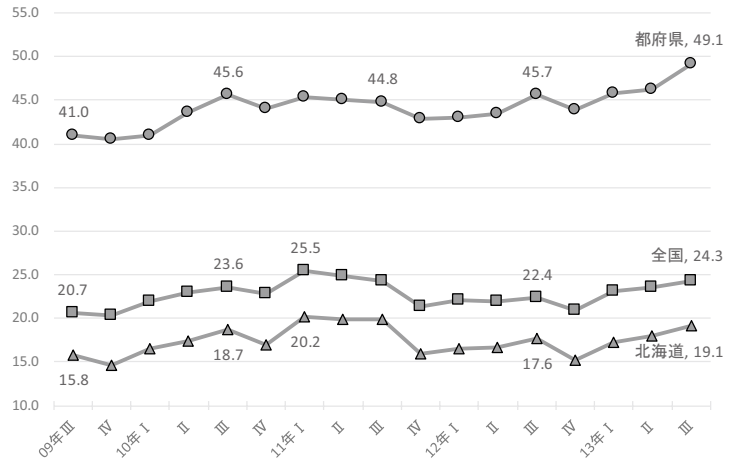
日本家畜人工授精師協会によると、2013年7～9月期の都府県における乳用牛への黒毛和種の交配割合は49.1%に達した。生乳の減産傾向からの脱却が期待されている中、将来の搾乳後継牛不足に拍車がかかることも懸念される。

全国の乳用牛への黒毛和種交配割合は近年、緩やかな上昇傾向で推移してきたが、2012年10～12月期（図中では「12年Ⅳ」と標記）を起点に明らかな上昇傾向に転じ、2013年7～9月期（同「13年Ⅲ」）に24.3%に達した。地域別では、北海道が19.1%、都府県が49.1%となっている。近年の傾向をみると、7～9月期は高水準になる傾向にあるが、都府県でみられた今回の上昇は記録的と言える。

この背景には、交雑種の枝肉価格が堅調に推移していることがある。その動きに連動して交雑種初生牛の需要が増加し、需給が均衡する価格水準も上昇傾向を示している。農畜産業振興機構が取りまとめた2013年5月以降の市場取引価格は15万円以上を維持している。市場関係者によると、今後も大幅に下落することは想定しにくいようである。

なお、都府県での乳用牛への黒毛和種交配割合には、いわゆる「西高東低」の傾向がみられる。つまり、2013年7～9月期において、九州は56.2%、中四国は59.6%、近畿は56.8%、北陸は58.1%、東海は48.5%、関東は49.1%、東北は35.4%となっている。さらに、都道府県別にみると、新たな問題が明らかとなる。表では、乳用牛成畜飼養頭数の多い10道県における人工授精の状況を示したが、主要な生乳生産県である千葉県、群馬県、

乳用牛への黒毛和種交配割合の推移



愛知県などの黒毛和種交配割合が高いのが特徴的である。

乳用牛への黒毛和種の交配状況が生乳生産に影響を及ぼし始めるのは、母牛の妊娠期間及びその子牛の育成・妊娠期間を経た3年後である。しかし、乳用牛の成畜飼養頭数が減少傾向にある状況の下では、黒毛和種の交配割合が高水準で推移することによって、搾乳後継牛の需給ひっ迫と価格上昇に拍車がかかり、長期的なトレンドとして、生乳生産コストの上昇と生産量減少が常態化することも懸念される。

乳用牛成畜飼養頭数の多い県における人工授精の状況(授精延べ頭数)

	成畜頭数 13年2月1日現在 (頭)	人工授精時期								
		13年1～3月			13年4～6月			13年7～9月		
		授精頭数 (頭)	うち黒毛 和種(頭)	黒毛割合 (%)	授精頭数 (頭)	うち黒毛 和種(頭)	黒毛割合 (%)	授精頭数 (頭)	うち黒毛 和種(頭)	黒毛割合 (%)
北海道	522,100	262,074	45,125	17.2	261,492	46,956	18.0	269,080	51,378	19.1
岩手県	31,200	7,620	2,124	27.9	7,005	1,888	27.0	6,679	1,957	29.3
宮城県	16,500	1,563	586	37.5	1,615	549	34.0	1,436	536	37.3
茨城県	22,100	2,201	718	32.6	2,219	729	32.9	1,626	550	33.8
栃木県	41,500	348	65	18.7	1,544	361	23.4	1,273	277	21.8
群馬県	29,400	6,193	2,618	42.3	5,708	2,402	42.1	4,812	2,128	44.2
千葉県	29,400	9,662	4,632	47.9	8,570	4,111	48.0	8,261	4,318	52.3
長野県	13,800	174	103	59.2	184	97	52.7	139	68	48.9
愛知県	24,100	1,934	834	43.1	1,909	783	41.0	1,585	685	43.2
熊本県	32,800	1,648	535	32.5	1,408	510	36.2	1,204	465	38.6

資料：一般社団法人 日本家畜人工授精師協会調べ